

IX. 諏訪神社に残る文化財と棟札から見る神社の歴史

1 諏訪神社について

諏訪神社山門の脇には次のように書かれた案内板があります。

諏訪神社の由来

一祭神 (建御名方富命タテミナカタミノ、ミコト)

往古より此の地に鎮座し嘉禎三年諏訪大社の分神として諏訪大明神と称した。宝永三年には社領二貫二八〇文であった。明治維新に勅令で返上し明治六年に村社に列し十七年諏訪神社となり同二十六年神田七反歩を社有地として下付の許可により復元した。然し昭和二十年終戦のあと戦後処理の農地解放令により耕作者に帰属する。大正二年神饌幣帛料供進の指定を受ける。神威高く地域の産業の発展と氏子の幸福のため諏訪形の産土神として伝承され崇敬者多く近隣近郊に及び昭和二十一年宗教法人となる。

注

一貫文は凡そ田五〇〇坪取れ高二石四斗七升古来神田からの収量米を用いて濁酒を造り祭礼時に参拝者にふるまうのが恒例であり因みに近隣神社の社領は三〇〇文であった。当社の大正年間小作料は七石五斗を収納していた。(価格二六六円六七銭)

二社殿の変遷

社殿の創建時は詳かではないが嘉禎三年(西暦一二三八年)社殿の再建とあり更に文明六年享保九年改築が行われる等数次に及び大正十一年新增改築があって現社の社殿となる。

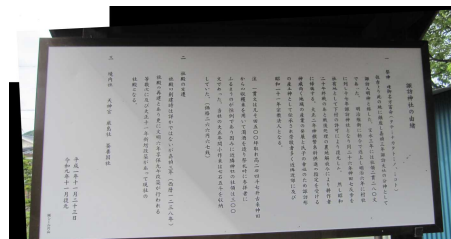
三境内社

天神宮 厳島社 蚕養国社

平成二年十一月二十三日
令和元年十一月復元

(株)シール片山

注：嘉禎三年は1237年のため、誤記であると思われます。

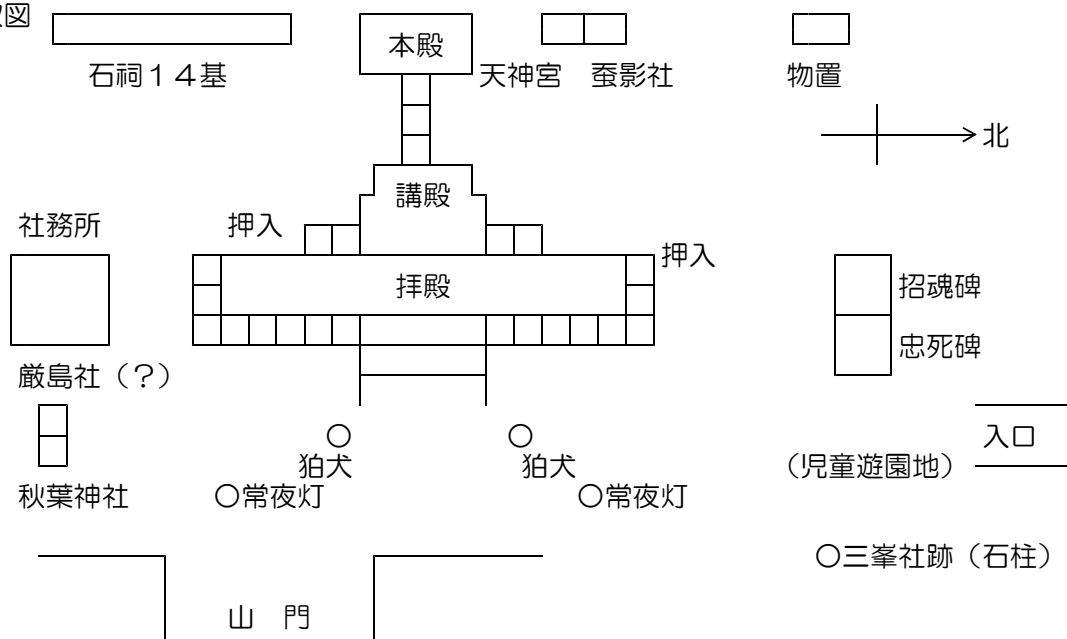


【コラム 「諏訪神社の由来」を修正した話】

上記の「諏訪神社の由来」の一番最初の部分「往古より」は最近まで「住吉より」と書かれていました。けれども、「諏訪神社が住吉からこの地に鎮座した」というのはちょっと妙な話です。窪田善雄さん(諏訪形誌活用委員会委員)がそれに気づき、原本とされる原稿を調べたところ「往古」と書かれていたことがわかりました。確かに、「往古」と「住吉」の文字は似ていますよね。

これを何とか修正しようということになったのですが、そこで意外な技が役に立ちます。窪田さんの趣味のひとつがプラモデル。その彩色をする技術を使って「にんべん」を「ぎょうにんべん」に、「吉」を「古」に修正しました。ちょっと見ただけではわからない程度にうまく直っていますが、ヒマだったらよく見て下さい。修正の跡がわかります。

諏訪神社見取図



「諏訪神社の由来」中の「嘉禎三年諏訪大社の分神として諏訪大明神と称した」という記述の根拠は、長野県立歴史館に残る手書きの資料『村社諏訪神社取調帳（製作年代不詳）』に記録されている3枚の棟札の記載と考えられます。それらの棟札は、以下の年に書かれたものと記載されています。

- 嘉禎3年（1237年…鎌倉時代前期）
- 文明6年（1474年…室町時代後期）
- 享保9年（1724年…江戸時代中期）

これらの棟札は長野県立歴史館に手書き史料として残っているだけで、実物は行方不明となっていて『諏訪形誌』執筆の段階では確認できませんでした。しかし、2024（令和6）年の春、元諏訪形誌編集委員会副委員長・諏訪形誌活用委員会の委員で、この年の諏訪神社神社委員総代を務めていた窪田善雄さんが諏訪神社本殿から10枚の棟札を発見し、それらの中に「嘉禎3年」と「文明6年」の棟札がありました。「享保9年」のものは残念ながら発見されませんでした。これらを含めて、棟札については後項で紹介、考察します。

ところで、2025年になって、金子素人という人が発刊した『諏訪形郷土史研究 郷土を知ろう 諏訪形の史跡めぐり（以下『史跡めぐり』と記載します）』という冊子があることがわかりました。この冊子は1997（平成9）年に出版されたもので、金子素人（良夫）さんが窪田為男さん、小出公尊さん、小池雅夫さん、柳沢英男さんなどとともに調査活動を行ってまとめた、たいへん示唆に富むものです。

この冊子の中に

文治6年（建久元年1190）諏訪神社文書によると社殿改築と明記されている。したがって、この年以前に既にこの地に鎮座していたことは明らかで、その創建は平安時代にさかのぼることができる。

とあります。1190年という、源頼朝が京都に上り、右近衛大将に任命された年ですから、平安時代から鎌倉時代に移行していく時期に当たります。その時に「社殿が改築された」という記録があるということは当然、諏訪神社は平安時代から今の場所にあったということになります。

ただ、出典とされている『諏訪神社文書』とは何なのかが確認できていません。『史跡めぐり』の中にはこの文書を根拠とした記載が数箇所見られるので、原本の存在が確認できると更にいろいろなことがわかってくる可能性があります。

2 諏訪神社の文化財など

（1）御神体

『史跡めぐり』には以下のような記述もあります。

諏訪神社本殿の奥に丸い石一個が安置されているという、この石がご神体であるとかきく

これについて、本稿執筆現在、諏訪神社総代を務める窪田善雄さんによると「本殿を掃除した時、箱が安置されていて、中を見て見たら丸い石が入っていたように記憶しています。何の変哲もない少し大きめの石でした」とのことです。この石が「御神体」であるようです。これまで、諏訪神社の御神体について触れられた記述はほとんどなかったため、貴重な調査であったと言えます。

（2）境内の社

境内には本殿のほか、「天神宮」と「蚕影社」の2棟の建物があります。

①天神宮

天神宮は、以前は諏訪神社参道の鳥居をくぐったすぐ右（北）側にあった天神宮の石祠を、昭和20年代に移したもので、とのこと。現在天神宮がある場所にはもともと、1911（明治44）年に須川から移された諏訪神社があったので、それと一緒にして「天神宮」としたのではないかと思います。



【コラム 須川の諏訪神社移転について】

須川にあった諏訪神社が諏訪形の諏訪神社に統合されたのは1912（明治45）年と記録されています。これについて、『諏訪形誌』では「古者によれば、須川では、しばらく「俺らの諏訪神社を諏訪形に持ってかれちゃった」という話があったそうです」と、感情的なわだかまりが残ってしまったような記載が見られます（たぶん、そのような雰囲気もあったものと想像できます）。

しかし、この移転統合については「須川鎮座諏訪社、社寺合併規則ニヨリ村社諏訪神社境内ニ移ス（中村御黨覚書帳）」とあり、法的なものだったことがわかります。『中村御黨覚書帳』とは何なのかは現在、不明ですが、いずれにしてもこの統合は恣意的なものではなかったようです。

②蚕影社

蚕影社は、字東山（諏訪形から須川に向かう旧道の途中で、悠生寮の東側あたり）にあった蚕影社を移したものです。遷移時期は『諏訪形誌』によれば1911（明治44）年とされていて、上記の「須川の諏訪神社」が移されたのと同時期です。

ただ、蚕影社移転後も祭礼などは字東山にある（旧）蚕影社で行われていたようで、昭和の前半には（旧）蚕影社前で相撲大会が行われたり、八十八夜にはお祭りが行われるなどしていた、とのことでした。

『史跡めぐり』には、東山の蚕影社はもともと荒神宮にあったものを「故あって（詳細は書かれていません）」東山に移転したものと記載されています。その後、もともと蚕影社があった東山地籍には石祠が建てられました。この祠は傷みが激しく、倒壊も危惧されていましたが、近年、しっかりと補修されました。



③三峯神社

諏訪神社の境内で現在児童公園となっている一角に、写真左のような高さ2mほどの石柱が（かなり不自然なかたちで）立っています。この石柱の上には木祠の三峯神社がありました。三峯神社はもともと、腰巻地区（上田市霊園あたり）にあったものを「大正5（1916）年 三峯神社は従前は同村腰巻の丘上に安置たりしが議員協議の上6月、村社諏訪神社境内に移す（『中村御黨覚書帳』による）」と記されているということで、諏訪神社境内に移されたもののようです。ただ、木祠（萩の棒で組まれた祠だったとのこと）だったために朽ちてしまい、現在は祠が載っていた石柱だけが残っているとのことでした。諏訪形でも一時期三峯神社信仰が盛んで、埼玉県秩父の三峯神社への代参も行われていました。

（3）石造文化財

①秋葉神社

諏訪神社の鳥居をくぐり、本殿に向かって左側（南）の隅に2基の石祠があります。『史跡めぐり』には「中村地区の管理する秋葉神社で、江戸時代後期頃大火にあい、ために防火と無難災を祈念してお迎えしたのだという。その中の一基に、文政2年卯年（1819）と刻字されている」とあります。



「江戸時代後期頃大火」というと、1811（文化8）年の「諏訪形大火」が想起されます。「荒神宮」の項で詳しく述べましたが、当時の諏訪形中心部に当たるかなりの地域が焼失してしまった大災害です。この火災のことをさしているのでしょうか。写真左側の祠が「秋葉神社」と見られます。ただ、この祠については「天神社である」と記載されている資料もあるようですが、誤りではないかと思われます。

写真右側の石祠は『諏訪神社の由来』にも書かれている「厳島社」です。

②14基の石祠

本殿の南側空き地には14基の石祠が一行に並んでいます。ほとんどが無記名、または読み取れない状態となってしまっていますが、『史跡めぐり』によると「寛政・文政年中と施主名の刻字の祠が若干みられる」とのことです。屋敷の敷地内などにあった石祠を代表神社に集め、合祀したものではないかと考えられます。同様の石祠群は荒神宮にも見られます。



北沢伴康さん（諏訪形誌活用委員会顧問・元諏訪形誌編纂委員長）はこれらの石祠の中に「みしゃぐじ」があるのではないかと考えています。

【コラム ミシャグジ】

「ミシャグジ」はかなり正体不明な部分も多くありますが、一般的には諏訪地域とその周辺に祀られる神霊・精霊の総称と見ることができます。諏訪大社上社の神事にも登場します。今井すみ江さん（筆名は今井野菊 1900年～1982年 諏訪地域在住の郷土史家、アラギ派の歌人）は「長野県には750余りの「ミシャグジ」系の神社が存在し、そのうち諏訪109社、上伊那105社、下伊那36社、小県104社などが多い郡である」としています。また、東海地方から関東にかけてミシャグジが見られます。なお、北沢さんは「調査の結果から、ミシャグジと諏訪神社、前田という地名の3つは互いに関係が深いのではないか」と『上田盆地第24号（上田民俗研究会 1985（昭和60）年刊）』で述べています。

③忠死碑

日清戦争（1894（明治27）年～1895（明治28）年）で亡くなった、当時の城下村出身者を悼む碑で、「明治29年4月 城下村有志者建之」とあり、「陸軍憲兵一等軍曹 柳沢国吉」「陸軍輜重輸卒 横関嘉三郎」のおふたりの名前が刻まれています。

日本の軍隊では「兵士」と「輜重輸卒（軍隊の武器弾薬や食料などの運搬を担当する）」との間にはかなりはっきりとした上下関係があったのですが、このように、言わば平等に扱われていることは、この地域の人々の人権意識の高さを示すもの、と言えるかもしれません（談：窪田善雄さん）。



④招魂碑

日露戦争から太平洋戦争に至る期間、城下地区出身の犠牲者150人あまりを祀った碑です。「昭和28年上田市城下地区協議会建之」とあります。

加々井正一さん保存の『日露戦争従軍者調』によると、旧城下村（小牧・諏訪形・三好町・御所・中之条）から日露戦争に従軍した人々は将校3、準士官2、下士官16、兵卒67の計88人で、そのうち、戦死者3、戦病死者3、負傷者10となっています。

この「招魂碑」は第二次世界大戦直後の1945（昭和20）年には、アメリカ軍からの訴追の恐れがあるということで、当時の諏訪形区長、羽田武邦さんらによって一旦地中に埋められました。その後1953（昭和28）年になって、当時の諏訪形区長岡厚さんが中心となって掘り起こし、現在のかたち復活したという記録が残っています。1953年の復活行事は当時の上田市長や地域選出の国会議員なども参加して盛大に行われました。

（4）初日の出と諏訪神社

諏訪神社に向かう参道は、ほぼ東、若干南寄りから本殿に向かっていきます。そのため、元日の日の出時には諏訪神社本殿から見て、ちょうど参道の鳥居から太陽が上がってくるように見えます。また、その日差しが本殿の鏡に映る「初日の出」は神々しいものがあります。

【コラム 諏訪神社の賑わい】

『史跡めぐり』には、諏訪神社の賑わいについて次のように記載されています。

戦前までの秋の例大祭には相撲大会や、その他催し物・出店などもあって賑わいを見せたが戦後は時代とともにすべて簡略化されている。しかし12月31日の年越しから元旦にかけての2年参りの参詣者は比較的多く、役員は徹夜で焚火をしながら参詣者に祝酒を振る舞い新年の挨拶をかわすのが、今でも恒例となっている。

特に元旦の初っ日の出の7時10分頃、東の山並みは茜色に染まり、やがて真っ赤な太陽が参道や鳥居・社殿を照らす描写は神秘的である。

注：仮名遣いなどは原文のまま

3 諏訪神社に残る棟札から見る諏訪神社の歴史

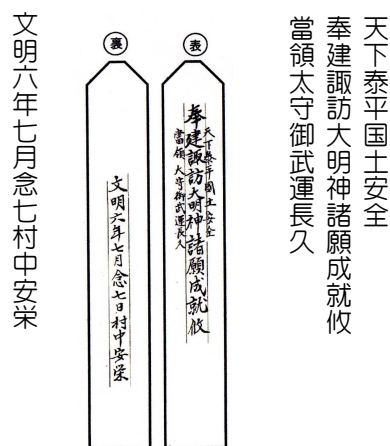
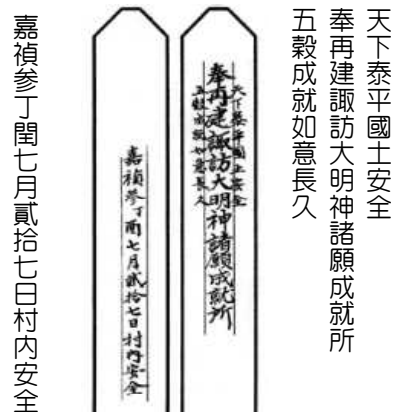
(1) 嘉禎3年(1237年…鎌倉時代前期)と文明6年(1474年…室町時代後期)の棟札

まず、嘉禎3年と文明6年に書かれたとされる2枚の棟札ですが、これらは後から作られたものである可能性が高い、と窪田善雄さん(諏訪形誌活用委員会委員)は考えています。

嘉禎3年は鎌倉時代前期で、鎌倉幕府の将軍は第4代藤原頼経です。「鎌倉の大仏(高德院の本尊、国宝銅造阿弥陀如来坐像)」の建立が始まったのは嘉禎4年と考えられています。また、文明6年というと、応仁の乱(応仁元年(1467年)～文明9年(1477年))に始まる「戦国時代」の初期です。当時の室町幕府将軍は第8代将軍の足利義政で、文明14年には慈照寺観音殿(銀閣寺)の造営が始まっています。一休宗純(一休さん)が大徳寺の住持に就任したのはこの年(文明6年)です。



藤原 頼経



今回、諏訪神社で発見された嘉禎3年と文明6年の棟札を『村社諏訪神社取調帳』に記載されているものと比較してみると、裏面の日付などは一致するものの、表面の記載についてはかなり簡略化されていることがわかります。このことから、今回見つかったものは、後述する享保9年に作製された棟札のレプリカと考えられますが、これらがいつ、どのような理由で作製されたのか、実際の所とところは不明です。

また、『村社諏訪神社取調帳』に掲載されているこの2枚の棟札には「村内安全」「村中安栄」など、抽象的な記述しかなく、具体的な内容が書かれていません。享保9年以降の棟札には「屋根の葺き替え」「祭典」など具体的な出来事が記載されていますが、この2枚にはそれがありません。また、以後の棟札には村や神社の関係者、作業に当たった人物の名前なども記載されているのに対し、この2枚にはそのようなものもありません。そこで推論として、この2枚は享保9年に社殿の改築を行った際、過去の伝承をもとに書いて加えたものではないか、ということが考えられます。

ただ、諏訪神社にとって嘉禎3年と文明6年の再建伝承は貴重なものです。それ故、これらの伝承に基づく何らかの祭礼が行われたときに棟札の代用品が必要だったのではないかと考えられます。

棟札は本来、天井裏の棟柱に貼り付けておくものですから、もしかしたら、享保9年のものも含めて『村社諏訪神社取調帳』に掲載されている3枚の棟札は、今も拝殿の天井裏に存在している可能性はおおいにあるものと思われます。

(2) 享保9年(1724年…江戸時代中期)の棟札

残念ながら今回、享保9年の棟札は見つかりませんでしたので、長野県立歴史館所蔵の『村社諏訪神社取調帳』から再現したものを載せます。

享保年間には江戸時代中期、徳川吉宗の「享保の改革」などで知られる時代で、江戸幕府の権力が確立した時代です。

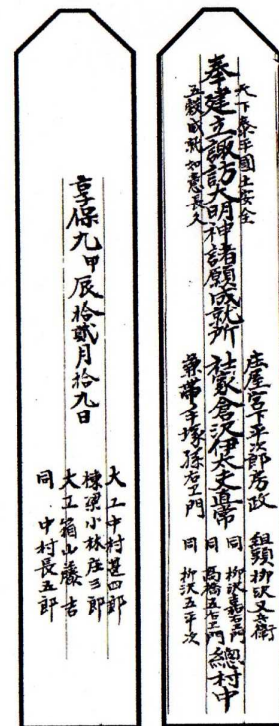
この享保9年の棟札には当時の神官や、庄屋など村のリーダーたち、実際の作業に当たった職人の名前なども具体的に記載されており、前の2点とはかなり大きさ差違があることがわかります。

天下泰平國土安全
奉建立諏訪大明神諸願成就所

庄屋宮下平次郎房政
社家倉沢伊太夫直常
兼帯手塚孫右工門

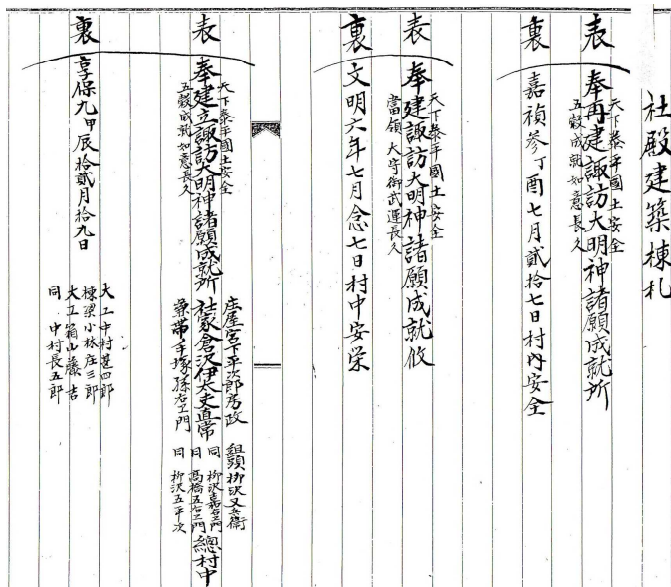
組頭柳沢又兵衛
同 柳沢嘉右工門
同 高橋五右工門
同 柳沢五平次

總村中



享保九甲辰拾貳月拾九日

大工中村甚四郎
棟梁小林庄三郎
大工箱山藤吉
同 中村長五郎



上図：『村社諏訪神社取調帳』より（長野県立歴史館蔵）

（３）文化９年（１８１２年…江戸時代後期）の棟札

文化９年の諏訪神社改築についてはこれまでまったく知られていませんでしたが、この棟札の発見によって一次史料で確認できたことは大きな成果です。今のところ、前述の「享保９年の棟札」の実物が見つかっていないので、この棟札は一次史料で諏訪神社の改築工事が確認できる最古のものとなります。

この年の棟札には「諏訪大明神中築」とあることから、諏訪神社の改築が行われたことがわかります。また当時、諏訪神社は「諏訪大明神」と呼ばれていたこともわかります。改築工事に関わった職人などの住所や人名なども具体的に記載されています。

ただ、世話人などに名前が見られる「横林姓」は須川に多い姓です。須川にあった神社が諏訪形に移転されたケースも多く、この棟札は須川にあった「諏訪大明神」の棟札である可能性が高いと思われます。

諏訪大明神中築

棟梁常田村
荻原万蔵義知（花押）
踏入村 茅野文蔵
柳澤 坂口武右衛門
當村組頭 横林六兵衛
長百姓 同 入蔵

世話人 横林六右衛門
横林利左衛門
同 兼右衛門
同 利平
同 和右衛門
同 長吉
同 重五郎



文化九年 壬 中冬吉日



○文化九年（１８１２年…江戸時代後期）

なお、文化９年は江戸時代後期、徳川家斉が１１代将軍だった時代です。町人文化が顕著に発展した時期で、後続する文政期とあわせ「化政文化」と呼ばれる時代です。また、日本史の話ではありませんが、１８１２年はナポレオンがロシア帝国との戦いで敗れた年でもあります。

（４）嘉永６年（１８５３年…江戸時代後期）の棟札

江戸時代も終わりに近づく嘉永６年の棟札です。この年はペリーが黒船４隻を率いて浦賀に来航したり、ロシアのプチャーチンが開国通商を求めて長崎に来港するなど、歴史が大きく動き始めたころです。

この棟札の表面は残念ながら何が書かれているのかを読み取ることができません。画像ではわかりにくいのですが、うっすらと残っている痕跡からは「正遷宮●神楽行事五穀●●●…」と読めます。「正遷宮」とは神社の改築が終了してご神体が神社に戻ることで、この年に諏訪神社で本殿の改築工事が行われたことがわかります。

また、裏面についても崩し字が良く読み取れません（読める方、教えてください）。ただ、宮下理兵衛（江戸末期から明治初期に活躍した宮下理兵衛の父親でしょうか？）や荒井助次郎といった、諏訪形誌ではおなじみの名前が見られます。

嘉永六年
丑 七月二十七日

庄屋
宮下理兵衛
荒井助次郎

組頭細川

（この部分、全然読めない）



(5) 安政5年(1858年…江戸時代後期)の棟札

江戸時代も終わりに近い安政5年の棟札です。福沢諭吉が慶應義塾の前身となる蘭学塾を創立したり、年末には大老井伊直弼による「安政の大獄」が始まった年でもあります。

この棟札には「正遷宮神樂行事」とあり、この年に改築工事が行われたことがわかります。ただ、この棟札も文化9年のものと同様、書かれている姓は須川地区に多くあるものであることから、諏訪神社の改築の記録ではなく、須川にあったいずれかの神社の改築記録が諏訪神社に残っているものと見た方がよいではないかと思われます。『諏訪形誌』でも述べているとおり、現在の諏訪神社にはもともと須川にあったいくつかの神社が遷されています。その中のどれかに残っていた棟札と考えるのが妥当かも知れません。

さらには、前述のとおり諏訪神社は、嘉永6年に改築工事を行っており、わずか5年後に再び大規模な工事を行ったということは考えにくいと思います。

なお、「宮本陸奥頭藤原但次代」とありますが、これが何を指しているのかは不明です。上田藩主の官位は代々「伊賀守」でした。

宮本陸奥頭藤原但次代

正遷宮神樂行事 神々感應産子安全常佳安穩攸

天下太平国家安全五穀取上

大神主



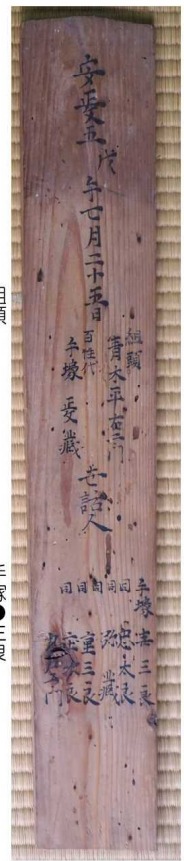
安政五戊年 七月二十五日

百姓代 手塚政蔵

組頭 青木平石工門

世話人

手塚●三良 同 忠太良 同 弥蔵 同 重三良 同 庄次良 同 大石工門



【コラム 嘉永年間・安政年間と地震】

江戸時代末期は地震活動が活発だった時代として知られています。安政年間と直前の嘉永年間後期には「伊賀上野地震(嘉永7年 1854年)」「安政南海地震(嘉永7年 1854年)」「安政東海地震(嘉永7年 1854年)」「伊賀上野地震(嘉永7年 1854年)」「安政江戸地震(安政2年 1855年)」「安政八戸沖地震(安政3年 1856年)」「飛越地震(安政5年 1858年)」など、大きな地震が頻発した記録が残っています。この棟札が示している歴史もそのような自然災害などとも関連があるのかもしれませんが。

(6) 明治17年(1884年)の棟札

明治17年に「祝祭が開催された」という棟札です。ここでは社名が「諏訪大明神」ではなく「諏訪神社」と書かれている点が注目されます。

この時期に「諏訪大明神」から「諏訪神社」に改称されたということは、諏訪神社境内の説明板にも記載されていますが、この棟札はその時の祝祭について記録されたものですから、この棟札は「この時期に改称された」という事実を裏づける一次史料として貴重なものです。

なお、諏訪神社境内の「諏訪神社の由来」にも「明治十七年に諏訪神社と改称された」と案内されています。

信濃國小縣郡諏訪形村宇宮田鎮座
村社 氏子壹百参拾四戸 戸長宮下宮次郎
奉改稱諏訪神社祝祭
明治十七年五月十一日
祠掌訓導松前朝道
全 筆生 増澤信吉 祭典係
全 小林紋太郎
全 細川吉郎
全 手塚頼蔵
小林隣治 伍長
宮下島吉
小林慶吉
柳沢卯作
宮下留太郎
増澤忠左工門
柳沢種十
手塚義右工門
林玄十
上原角治
飯田信定
細川銀右工門
窪田五蔵
増澤傳十
柳沢幸作



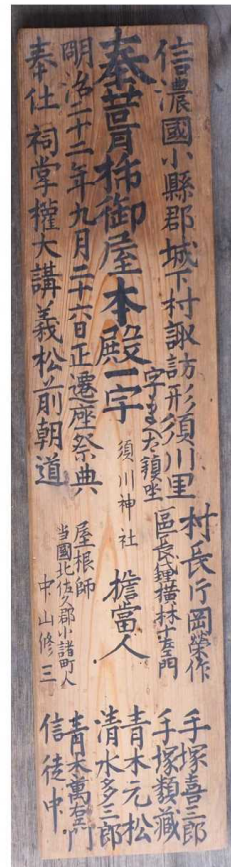
(7) 明治22年(1889年)の棟札

諏訪形の諏訪神社本殿から見つかった棟札ですが、諏訪神社のものではなく、「信濃國小縣郡城下村諏訪形須川里」の「字まへた(前田)」にあった神社の棟札です。

須川にあった諏訪神社が諏訪形に移された話は『諏訪形誌』や「安政5年の棟札」でも触れていますが、そのことと関連があるものと考えられます。

なお、明治22年は「大日本帝国憲法」が発布された年です。また、東海道本線(新橋―神戸間)の開通やパリ万博が開かれたのもこの年です。

信濃國小縣郡城下村諏訪形須川里
字まへた鎮座
村長 片岡榮作
區長代理 横林十左工門
奉 ●●● 御屋本殿一宇 須川神社 檐當人
明治二十二年九月二十六日正遷座祭典
奉仕祠掌權大講義松前朝道
屋根師 當國北佐久郡小諸町人 中山修三
手塚喜三郎
手塚類藏
清水元松
清水多三郎
青木萬石工門
信徒中



(8) 明治30年(1897年)の棟札

明治30年に「諏訪神社の屋根を葺き替えた」という棟札です。

10月14日に作業を始めて20日には終了し、22日に遷宮を行った、とたいへん具体的に記載されています。

信濃國小縣郡城下村字諏訪形鎮座
諏訪神社御本殿屋根替成就
社掌 上條司



明治三十年十月十三日 假遷宮
同年 十月 十四日 事 始
同年 十月 二十日 事 修
同年 十月 二十二日 正遷宮
區長 小林林治
代理 柳澤万八
東組總代 細川銀右工門
中組氏子總代 窪田五蔵
窪田光江
窪田幸右工門
當番西組總代 小林常次
小林広八
柳澤万八



【コラム この間（明治30年と昭和11年の間）の出来事】

明治45（1912）年には、須川にあった諏訪神社を諏訪形の諏訪神社に移したという記録があります。これについて、「須川のお宮を諏訪形に取られた」というような感情的なしこりが残ったという、真偽不明の話も伝わっています。この移転について、前出の「諏訪形郷土史研究 郷土を知ろう 諏訪形の史跡めぐり」では

明治45年（1912）、「須川鎮座諏訪社、社寺合併規則ニヨリ村社諏訪神社境内ニ移ス」とある。（中村御黨覚書帳）

と記載されていて、恣意的な移転ではなく法に基づくものであったと述べています。ただ、ここに出てくる『中村御黨覚書帳』という文書はどのようなものなのかは不明です。

この須川にあった諏訪神社の建物は現在、諏訪神社境内に「天神宮」として、諏訪神社本殿の北隣に残されています。

また、『諏訪形誌』の記載にもあるとおり、この間の昭和3（1928）年に、諏訪神社は当時の内務省に対して「社格昇進願」を出しています。これは、戦前まで存在した神社の公的ランキングである「社格」について、現在の「村社」から「郷社」に昇格させてほしい、という要望です。

この「願」の文書の中に諏訪神社の来歴が記されており、その中に「嘉禎3年に社殿を建て替え、諏訪神社上社から注連（しめ縄）を授かった」「文明6年に社殿を建て替えた」という記述があります。この記載の元となったものが本稿1で述べている2枚の棟札であると思われます。ただし、これらは前にも述べたとおり、享保9年の社殿改築に際して棟札が書かれたときにいっしょに作られたものである可能性が高いものと考えられます。なお、結果的にはこの願いは却下されてしまい、「郷社」への昇格は叶いませんでした。

（9）昭和11年（1936年）の棟札

昭和11年は「2・26事件」の起きた年です。

諏訪神社ではこの年の9月10日に仮遷宮をおこなって本殿の屋根を葺き替え、9月16日には完成して正遷宮を行ったことがわかります。

假遷宮祭 昭和十一年九月十日執行
正遷宮祭 昭和十一年九月十六日執行
奉諏訪神社御本殿御屋根葺替



奉仕社掌關守人
區長 手塚國壹
代理 中村求馬
氏子総代 細川威三
全 飯田 徹
全 手塚 勝
祭典係
細川三郎
増澤淺吉
柳澤恒助
窪田正雄
柳澤清一
宮下源次
清水喜一郎
手塚光治



(10) 昭和37年(1962年)の棟札

もっとも新しい棟札は昭和37年のものです。この年、本殿屋根の改修を行っています。

神社総代や(神社)委員の中に懐かしい名前も見られます。

假遷宮祭 昭和三十七年三月二十六日執行
奉諏訪神社御本殿御屋根改修
正遷宮祭 昭和二十七年四月十四日執行



神社総代 細川三郎
奉仕社掌横関真静
柳澤末吉
柳澤敬二
手塚今朝雄
委員 北澤道之助
浅野重徳
柳澤一光
宮下末男
小林蔵雄
久保田良平
宮下今朝雄
窪田三郎
窪田幸良
柳澤清一
増澤兵衛
宮下三喜平
両角玉静
清水茂雄

